国立国会図書館70年史の時代区分 -役割の二重性を手がかりに-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館情報学研究会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 昌樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22498

＜講演会記録＞

国立国会図書館 70 年史の時代区分：役割の二重性を手がかりに

小林 昌樹

明治大学図書館情報学研究会では、2021年6月23日（水）、明治大学和泉キャンパス 第1校舎において2021年度第1回例会を開催し、慶應義塾大学非常勤講師の小林昌樹氏による講演「国立国会図書館 70 年史の時代区分：役割の二重性を手がかりに」を行った。小林氏が29年間在籍した国立国会図書館の状況も含めて、これまで3回、発行された記念誌（正史）には記載されていない事件や事業について把握することで、70年に渡る国立国会図書館の歴史を俯瞰的に通覧する。

小林氏略歴:1967年東京生まれ。1992年慶應義塾大学文学部卒業。同年国立国会図書館に入館し、2005年からレファレンス業務に従事。2021年退官し慶應義塾大学で講師をする傍ら、近代出版研究所を主宰。近代書誌懇話会代表。専門は図書館史、近代出版史、読書史。『公共図書館の冒険』（みすず書房、2018）では「図書館ではどんな本が読めて、そして読めなかったのか」を担当した。著作は次のサイトを参照：<https://researchmap.jp/shomotsu/>。

1. はじめに 問題提起——自分の体験と組織風土の変化

1.1 司書としてのキャリア

三浦先生にご紹介いただいた、小林昌樹です。この3月まで勤めていた国立国会図書館（以下、国会図書館）という、千代田区の永田町にある図書館の歴史について話します。

最初に自己紹介をすると、私はもともとビザンツ帝国史をやりたいと思って、それには学費が要るので、たまたま大学の図書館でアルバイトを1年間したのです。夜間閲覧の午後3時から午後9時まで出勤するものだったのですが、このような仕事もこの世にあるのかと気が付きまして、慌てて西洋史はやめて図書館情報学のほうに行き、それで1992年、

国会図書館に首尾よく入ったというわけです。もともと歴史が好きでした。

入ってからのキャリアですが、最初は閲覧部門¹⁾で3年ぐらいやって、その後、分類件名係で件名と分類番号を付ける仕事を6年間やりました。今は仕事のやり方が変わったのですが、当時は1年間その仕事しかないのです。本を見て分類番号を付けて、毎日同じ、それ以外のことは全くせず6年間やって、大体どんなタイプの本がこの世にあるのか分かるようになってきました。

さらにその後、これはこの前までやっていたのですが、15年ぐらいレファレンスサービスをしました。私は歴史とか文学の担当の部屋にいて、お客さんが困ったときに資料調べのお手伝いをするというのを一通りやりました。

今回はこの前まで勤めていた国会図書館を歴史的に見てみたいということで、皆さんにお話します。予告の紙にざっとしたことは書きましたが、お手元に2種類の資料をお配りしてあります。一つはよくあるレジメと、もう一つは年表です。年表は後からお話しするので、レジメの話をしていきたいと思えます。

1.2 組織風土の変化

最初に問題提起ですが、私が国会図書館に入ったときと出たとき、館内の雰囲気があからさまに逆さになっていました。「入館」（国会図書館は一応、省庁扱いなので、ほかの省庁だと入省といえます）し

2022年1月27日受理

こばやし まさき 慶應義塾大学非常勤講師

たのが 1992 年で、退官したときの 2021 年とは雰囲気まるで違う。例えば 90 年代に永田町に残って夜に一生懸命に残業をする、サービス残業も含めてですが、これはよくないことと思われていました。単に怠けて残業しないわけではなくて、熱心な人ほど定刻に早く帰って、遊ぶなり勉強するなり研究するなりしなさいという言い方がされていたのです。けれども、2010 年代ごろになると、一生懸命に残業をするのはいいことだという雰囲気に変わっていました。

あと外に出て話したり書いたりすることは、1990 年代はよいことであり、あるいはやっている人は尊敬されましたが、2010 年代になるといろいろ手続きが増えて面倒くさいことになっていったのと、あまり尊敬されなくなりました。なんでこんなに変わったのか疑問に感じたのが最初の取っ掛かりでした。

1.3 いつの時点で変わったか——関西館新設と館長降格

私は若い頃からのんびり屋で、基本的には 1992 年段階の私と今の私は同じことをやっているつもりです。でも同じことをやっても妙に褒められたり褒められなかったりするの、恐らく環境が何か違っていると考えるべきです。何が違ったのかと考えてみると、途中に国会図書館の組織上の大事件がいくつかあったことに気が付きました。

まずは 2002 年に関西館という建物が京都府にできます。できた理由は後で説明しますが、この時にそれまであった図書館研究所を廃止しています。これは役人になるとすごくよく分かるのですが、お役所というのは何かを新しく始めるときにはこっそり何かを必ずやめるのです。投下できる資源や予算が有限なので、何かを始めるときには何かをやめることになるのですが、やめるときになるべくこっそり言うというのが役人道²⁾の常道としてあるのです。あまりはつきり書かれないのですが、研究所がこのときになくなっていて、図書館学をやること、職員が直接やる³⁾ことに対する価値観が変わっているのではないかと思います。

これも役人道の一つなのですが、そこのお役所にとっての不祥事は歴史にあまり書かれないというかなるべく小さな形で書くというお作法があります。あまり有名ではないのですが、国会図書館の館長の位が 2 段階下がる事件ということが 2005 年に発生したのです。もともと国会図書館の館長は大臣の位

でしたが、2 段階落ちて法制局長官級になってしまいました。館長の格付けが下がると、私の給料が下がってしまうのです。正確には私自身（既存のメンバー）は下がらないのですが、職員がどんどん昇給していくときの上がり方が遅くなってしまいます。あとは、やれることが限られてしまうという、役人道から言うと本当に大失態の事件になるのです。この 2 つが取りあえず大事件としてあって、それが雰囲気の变化に関係しているのではないかと思うわけです。

1.4 過去に敷衍する

それは私の 30 年間の図書館人生の中で起きたことなのですが、私が入館するよりも前から国会図書館は当然あるわけなので、いろいろと調べて、それ以前も何か事件があって雰囲気が変わっているのではないかと仮定的に考えました。私は雰囲気という言い方をしましたが、サービス方針と言ってもよいかと。例えば 1950 年代に国会図書館の職員組合というのがはっきりと、国会を優先にサービスをすればいいのか、それとも国立として国民を優先すべきなのかという議論をやっていました。国立国会図書館法の第 21 条で、国会と国民の利害が反発したときには国会を優先するとはっきり書いてあるので⁴⁾、ある種、法律的な答えは出ているのですが。あと、1980 年代に館内の勉強会である人が言っていたのですが、国会図書館は大体 10 年周期で内向きになったり外向きになったりを繰り返すという、これは館内の飲み会とか勉強会とかでこういう言説が言われていました。

こういった話を集めてくると、私は自分がいる間に 1 回だけ変わったのかと思っていたら、そうではなくて、どうも 70 年の国会図書館の歴史で雰囲気が何度か変わっているのではないかということ考えたのです。特に最初の、組合が国会か国立かという問題提起をしていましたが、議員向けに一生懸命にやるのか国民向けに一生懸命にやるのかということ、内向き・外向きが本当は連動しているのではないかという気がします。

2. 日本の国立図書館の特異性

2.1 世界中でも特異な国会付属の国立中央図書館

なぜ国会図書館がそのような内向き・外向きとか国会向け・国民向けになるかということ、図で示しましたが、アメリカと戦後の日本だけ国立図書館の制

度が他の国と異なっているからなのです。このことは授業で習うとは思いますが、図の左側、普通の国はどこでも、国立図書館は行政府の教育とか文化を担当する省の出先に位置付けられて、教育省とか文化省から予算をもらう位置付けとなっています。ちなみに、戦前の日本には、帝国図書館という国立図書館があって、普通の国と同じ位置付けでした。戦後になってからアメリカと同じ形に位置付け直されたのです。

他方、この図を見ると、立法府、普通は行政府のほうに国立図書館は付属しているのに、なぜか立法府に付属しています。衆議院と参議院と同格として国立図書館、固有名としては国立国会図書館が付属しているという、特異な形になっているのです。

2.2 議会付属になったことのメリット・デメリット

このことを具体的に言い換えると、アメリカと日本の国立図書館だけ調査局という特別な部局を持っています。日本では「調査及び立法考査局」という長い名前、館内では「調立(ちょうりつ)」とか「局(きょく)」と言いますが⁹⁾、議員のために特別に文献調査を代行する部署です。大体100人ぐらいいます。議会付属でいいことが一つあって、行政府の教育省とか文化省の下に付いていなので、行政府の都合で予算がカットされることはないわけです。あくまで立法府に付属しているのです、内閣が国会図書館の予算を削減したいと思っても普通はできません。結果として立法府が国会図書館を守ってくれる形になり、このことはアメリカと日本だけの特徴となっています。

一応、国立図書館とはどのようなものかという一般論が、シルヴェストルという人の本に書いてありますが⁶⁾、ただし書きがあって、ここに引用しておきます。「反面、削減をどうしても甘受しなければならぬ場合には、立法機関に対する特別なサービスよりも国立図書館としてのサービスのほうが犠牲を被るのではないか」。1950年代の国会図書館の組合が言っていたのと同じ話をここでしています。基本的には立法府が守ってくれるから予算が減りづらいのですが、どうしても減らさないといけないときには国民部門のほうに切られてしまう可能性があるということになります。

さきほどの図に戻りますが、戦前の普通の国だったときの帝国図書館と戦後の国立図書館になった今の国会図書館で何が一番違うかという、大きさが

全然違います。今、予算という言い方をしましたが、具体的には戦前の帝国図書館は課レベルの位置付けなので、これは当たり前ですが、省庁の下になり、絶対に省庁並みにはなりません。職員数は、課レベルだと50人程度しかいません。時代によってはもっと少ない。それに対して、国会図書館は立法府に直接付属しているのです、国土交通省とか総務省とか防衛省とかと同じ扱いなのです。本省扱いという言い方になります。本省は千人から数千人ぐらいい職員がいるので、桁違いにいろいろなことができます。逆に帝国図書館は、帝国図書館という名前のわりには何もできない図書館でした⁸⁾。

2.3 国際的慣例で形成された国立図書館の任務

国会図書館が国会に所属していると、そういった特別に予算が減らされないとか、本省並みで職員がたくさんいるという利点もあるのですが、一方でどの国でも、国立図書館がしないといけない任務が歴史的に決まっています。国際図書館連盟(IFLA)のガイドラインにもありますが、国内の出版物を全部、法律で、罰則付きで集めます。日本にも一応、罰則はあって、本を、同人誌も含めて国会図書館に納めないと、定価の何倍かの罰金、過料を課されることになっています。ただ、実態論を言うと、罰金を取る際には手続きを一緒に決めておかないと取れません。70年間、手続きをつくっていないので、実際には取れないのです⁹⁾。

それから、本を国内から全部集めると、その本についての書誌データを全部つくりまします。これを全国書誌のデータとして国内や海外に頒布するのが一つ、もう一つは全国的なサービスをします。国立なので国民全体に対して奉仕、サービスをしないといけません。そうすると、国内の地方の図書館に本を貸し出すとか、あるいは海外の国立図書館と本を交換するのも国立図書館の任務になります。さらに、国立図書館そのものは行政機関ではありませんが、全国的な司書の養成とか図書館情報学の研究の振興とか、そうした全国政策もしないといけません。

2.4 実際している仕事の大半は大参考図書館

さまざまな図書館学のハンドブックを見るとそういったことが書いてあるのですが、実際に900人ないし800人の職員がやっている大多数の仕事は、特に国会図書館の場合には永田町で大きな図書館を運営することです。永田町に毎日1,000人ぐらいい来館

者が来ます。国民、実際には首都圏に住んでいて永田町に通える人だけですが、そうした人たちの対応をします。これは大きなレファレンス・ライブラリーです。大きなレファレンス・ライブラリーは東京に他にもあって、例えば有栖川公園にある都立中央図書館もそうです。実は国立が首都にあって大きなレファレンス・ライブラリーをすると都のレファレンス・ライブラリーと役割がかぶることになります。

実際に日比谷図書館という都立の図書館があったのですが、そこは国会図書館があるから要らないということで、都立図書館としての日比谷図書館は廃止されて、千代田区に移管されました。国立図書館の任務は慣例的にいろいろありますが、実際にやっていることの大半は大きなレファレンス図書館です。

2.5 戦前と戦後の国立図書館、それぞれの問題点

戦前の帝国図書館が小さかったと言いました。実は戦前の帝国図書館は本を集めてはいましたが、職員が 50 人くらいしかいないので全国書誌のデータをつくれなかったのです。今、国会図書館で全国書誌のデータを何人でつくっているかということ、大体 100 人ぐらいで作っているの、閲覧も含めて 50 人の図書館ではできるわけがないということになります。そのため、戦前の帝国図書館は実は国立図書館としては半分足りなかったということになります。

今の国会図書館は、国会付属の議員向けの専門図書館という館種でもあり、あと本来の国立中央図書館でもあるので、図書館学で言う、いわゆる館種が、実は二重になっています。図書館生活で私の実感が前半は外向きで後半は内向きだったのは、どうもこの館種の二重性が間接的に効いているのではないかと考えて、年表をつくってみました。

2.6 国会図書館の二重「館種」

一つの図書館なのに館種が二重なのはあまりよくないことで、これをはっきり言うひとがほとんどいません。20 年ぐらい前に三菱総合研究所の人がやってきて非営利組織の経営論という講演をした後に、国会図書館は経営論からしてどうかという話をしたのですが、非常にまずいということでした。つまり、お金もうけの組織、営利組織だといろいろな事業をやっても、最終的にもうかっているか否かで設置目的にかなっているかいないかが測れます。赤字続きだったら当然つぶれてしまいましたが、非営利組織はお金では測れない、数えられないので、そういうと

きには目的に照らしてどうかというように定量的ではなく定性的な測り方をします。けれども、国会図書館のように二重になっていると、それがすごく測りづらいのです。何かの事業をやったときに、国立図書館としてはよいのですが国会図書館としては駄目であるとか、国会図書館としてはよいけれども国立図書館としては駄目であるというのを統合的に測れないので、これは非常によろしくないと思つた人が言っていて、なるほどと思つました。ある種の二重人格になってしまう。だから、私が入ったときは外で図書館学の話をするのはいいことだという管理職がたくさんいましたが、今は渋い顔をされてしまうのは、同じ組織なのになぜと思つますが、ある種の二重人格なのかと思つます。

3. 【別表】国会図書館時代区分年表について

3.1 事業ごとに性格づけを 3 つに分類する——年表の水平軸

国会図書館年表をどのように作るかを考えたのですが、国会図書館は大きな組織であり、定員は 900 人ぐらいなのですが委託業者の人もたくさんおり、あわせて 1,000 人以上います。1,000 人からの組織がいろいろなことをやっているの、それを分類してみました。どう分類するかということ、この表の一番左のほうは、国会付属、議員のための特別なサービスを示しています。具体的には文献調査を代行するとか、レポートの作成もします。皆さんが図書館に行つて、レポートを司書に代わりに書いてもらうことはないと思うのですが、レファレンスサービス理論で最大理論というのがあって、アメリカの特殊な専門図書館では図書館員がレポートをつくることがあります。日本で唯一やっているのは国会図書館の調査局で、これは議員のためのものです。あと、国会会議録の索引も実は直接的には議会での議論のためのものになります。

この表の右側、全国的なサービスとしては全国書誌のデータをつくって全国に頒布するとか、利用者に対するレファレンス質問の回答以外に他の図書館で分からなかった質問が回ってくる制度があり、代わりに回答します。それをデータベースに登録して、インターネットで見られるようになっています。こういった協力レファレンスは永田町に来ている人ではなくて、全国に向けてのサービスとなります。さらに、郵送複写、コピーを来館しないでオンライン

で頼むというのも、全国的なサービスということになります。

3.2 受益者と評価者がズレること

この3つにいろいろな事業を分けて年表をつくってみました¹⁰。ここで重要なのは、さまざまなサービスをやらせてもらえば利用者はみんなうれしいし感謝してくれる、評価してくれるのですが、一体どういう人たちが評価するのかが問題となります。国会付属の専門図書館としてのサービスは当然、議員が評価してくれます。参考図書館的な仕事、お客さんがたくさん集まってきて一生懸命に本を出したり質問に答えたりするのも、来館者も感謝してくれるのですが、隣に議会があるので、議員もそういう目で見えてよく分かることは一応、評価してくれます。ところが、この全国的なサービスは目に見えないサービス、受益者にしか分からないサービスなので、評価する人が司書や図書館情報学の専門家なら評価してくれるのですが、議員はあまり評価しないサービスなのです。そのあたりは気を付けていただくとよいかと思います。

3.3 70年、通しの年表はどこに？

これから本論の年表の話をしよと思うのですが、年表をつくったときにいろいろな資料を使いました。一つ面白い資料を使ったのでお話しします。国会図書館は1948年にできたのですが、それ以降、70年を通しての年表は実は本の形であまりないというか、ここにたまたま最近出た『国立国会図書館七十年史』の本を持ってきましたけれども、これは1998年から2018年までとサブタイトルが付いていて、ここ20年ぐらいの話だけなのです。それ以前は『国立国会図書館五十年史』があります。それより前には『三十年史』が出ていて、わりと長い歴史がある組織はこういうように時代を分割して歴史の本を出すので、通しの年表は意外とないのです。

では、どこにあるかという『国立国会図書館手帖』という手帳にあります。中は普通のメモ帳というか、カレンダーが付いている手帳ですが、最後のところに国会図書館の職員向けの年表、あるいは国立国会図書館法の条文、憲法、ほかの図書館の蔵書統計などが載っているのです。これは毎年、館内の職員にだけ配布ないし販売されて、この最後に付いている年表が実は一番便利なのです。これを基にいろいろとつくったのです。OBにその話をしたら、

実はホームページにも同じ年表があると言われて、国会図書館のホームページでも同じ年表が出てきます。

3.4 国会図書館時代区分年表の説明

別表として国会図書館時代区分年表というのをつくり、そこにいろいろと書きました。その一番上、表頭の項目の説明をします。一番左のグレーになっている部分は私が作り上げた時代区分で、時代の切れ目というか、明るめな外向きの時代、暗いのは内向きの暗めな時代という2種の時代区分になっています。

その次の項目、重大事件とか重大事業には適宜、社会情勢とか国会図書館がらみの事件を入れました。どういう事業をやったのかは『七十年史』とか『五十年史』といった正史に出てくるのですが、事件が意外と書かれていません。特にいい事件ではなく悪い事件については、どこでもそうなのですが、団体史には書かれないか、書かれてもすごくぼやかした形で書かれることになるので、その辺は私がいろいろ足しました。

その次の国会付属的・参考図書館的・全国的というのは、それぞれそういう性格付けの事業をその年に始めたりやめたりしているということです。それから、図書館なので、どこでどういう建物を使ってサービスをするかはものすごく重要です。電子図書館事業以外は場所が重要になるので、それについても、建物・場所という項目を立てました。

あと、これは「中の人」でないと位置づけがわからないと思いますが、いろいろな事業をするときはやはり人間がやるので、それぞれの時代の首脳陣(具体的には館長・副館長・総務部長辺り)にどういう人たちがどのポストに座っていたかというのを年表にしました。これも通して年表にしたものではなくて、特に館長・副館長は年表でわりとすぐ分かるのですが、総務部長がそのとき誰だったのかはなかなか分からないのでつくりました。

それから、定員・部局・職員生活と書きましたが、定員は「年報」で文章に埋め込まれていて分かりづらいので、入れておきました。これらの項目でいろいろと時代区分を考えてみました。

4. 第I期:草創期(1948-1958)

4.1 鷹揚な金森館長と有能な中井副館長

第 I 期として 1948 年からの金森館長の時代というのがあります。1947 年に米国図書館使節団という項目を出しましたが、実は 1947 年に国立なしの国会図書館というのがすでに 1 年間だけありました。これはトリビアですが、この国会図書館は議員の教養のため、調べ物ではなくて教養のため、文学とかを読んでいただいて心を落ち着けてもらおうとか、そういう図書館としてあったのです。けれど、どうも議会の図書館というのはそういうものではないのではという話になって、アメリカから専門家を呼んで国会付属の図書館はどうあるべきかを直接指示してもらうことに衆参で決まったんです。アメリカで当時、一番いい人たちを 2 人（クラップさんとブラウンさん）連れてきて、その人たちに国会図書館はどういう仕事をしないといけないのかをメモ書きで全部書いてもらって、そのとおりに図書館をつくりましょうということになりました。ですから、1947 年のただの国会図書館というのは、内向きの普通の、参考図書館ですらない図書館だったのが 1 年間だけ議事堂にありました。

クラップさんとブラウンさんの指示どおりに図書館をやることになって、まずは幹部職員を集めないといけないということになりますが、そこで問題になるのが館長です。館長は、ここにも書きましたが、金森徳次郎さんがなりました。金森さんは日本国憲法を国会で通したときの担当大臣でした。ですから、昭和 20～30 年にはすごい有名人で知らない人はいないという人です。

その人を呼んでくることになるのですが、本当はもう 1 人、館長の候補がいました。それが副館長になった中井正一さんで、この人は学者だったのですが、本当は参議院のほうは中井さんを館長にしたかったようです。しかし、中井さんが共産黨員だという疑いをかけられて、もめにもめて、結局、妥協というか、衆議院が推した金森さんは館長に、中井さんは副館長にということで収まりました。

4.2 初代受入局長即日罷免事件

この時代の事件というのが一つあって、それが後で効いてくるのでお話しします。受入局という納本で本を集めるための部局がありました。その局長に円地与四松さんが初代に任命されたのですが、即日罷免になりました。理由はこの人は右翼の流れをくんでいて、当時、日本はアメリカ、正確には GHQ が統治していたので、GHQ が当初そういうのはす

ごく嫌がったのです。それがわかった段階で首にせよと GHQ の人が言ったので、即、首になるという事件がありました。左右対立¹¹⁾でいうと、金森さんは鷹揚な人なので、ライバル候補だった中井さんとはうまくやって、金森さんが PR を担当して、中井さんが図書館業界とか館の内政をやる形でうまくすみ分けて、10 年間続きます。

この時代の出版物や個人の写真アルバムを見ると、職員も含めてみんな前向きで楽しそうな感じです¹²⁾。事業としては、全国的なサービスに関わる全国書誌を発行したり、総合目録をつくろうとしたり、『雑誌記事索引』もそうですね、全国サービスの展開をやっていました。ただ、この時代、複写サービスのニーズがどんどん増えて、特に技術文献の複写を企業がやりたいというニーズがすごく増えていたので、どうするかという話がいろいろとあったみたいです。この時代は楽しい、特に問題もない時代の第 I 期で、明るい時代が終わることになります。

5. 第 II 期：守勢期(1958-1970 頃)

5.1 春秋会事件による暗転

年表の 1958 年のところを見てください。ここに春秋会事件というものを出しました。春秋会というのは複写をやる外郭団体です。今、国会図書館に外郭団体はありませんが、当時はありました。昭和時代はすべての省庁が外郭団体を持っていてお金がらみのことをやっていました。国会図書館にもあってそれが春秋会でした。コピーのニーズがどんどん増えて、直営ではしきれないので、そこにやらせていたのですが、お金を扱うので、首脳陣が私腹を肥やしているというタレコミが議員にあり、大変な騒動になります。この事件は皆さんでも普通にインターネットで国会会議録のデータベースで検索できます。

ただ、金森さんはいい人で、さっき話した、鷹揚な人、逆に言うと、結構いいかげんで任せ切りにしていたようです。だから、かなり手続きに不備があって、そこを突かれたのです。結局、初代の館長が責任を取って辞任することになります。かなりの大事件となりました。館内では 2000 年ごろまでこの話はしてはいけないと言われました¹³⁾。私も 1992 年に入館したときにある人から、これは話してはいけないと言われていました。

これ自体は大した話ではないのですが、最初に受入局長が右翼だから即日罷免になった事件がありま

したが、実は右翼の流れは結構あって、今はあまりないけれども、昭和 50 年代まで実際にいろいろとありました。戦前の右翼のテロリストのお友達が館内にいて、その人が次に館長になりたいと思ったようです。しかし、金森さんはいつまでたっても辞めるつもりがない。どうすればいいか。それは適当な外郭団体の経理を突けばいいと思いついたようです。ということで、国会図書館が明るい外向きの時代から、春秋会事件で首脳陣が全員いなくなって守りの時期に入っていくのが 1958 年以降になります。

年表を見ると、春秋会事件が始まって、春秋会そのものは廃止になります。副館長の中根さんも亡くなったので、この辺の話はまとまった形で書かれていないのです。

5.2 岡部副館長の立て直しと衆参事務総長の天下りの開始

副館長の 3 代目に岡部史郎さんがなりました。この人は行政管理庁から副館長として呼ばれて来た人でした。元行政管理局長だったので、万事につけて緩かった金森時代の体制を全部引き締める形で、いろいろと業務を厳格に運営するようになります。だから、あまり評判が図書館界でよくない人でした。副館長は大臣クラスの次なので事務次官クラスと同じ給料をもらいます。そんな人がほかから来るというのは、役人道から言うと、すごい大失態なのです。

ただ、岡部さんが呼ばれているいろいろと立て直しを図るということで、一時期は館長が空位、1960 年には館長がいなかったという事態になりました。そこで館長に新しくなるのが鈴木隆夫さんです。鈴木さんはもともと衆議院の事務総長でした。衆議院のトップというのは衆議院の議長、議員ですが、事務方に関して、当たり前ですけども、そこに国会官僚、行政官僚ではない国会官僚というお役人たちが数千人いるのです。その衆議院側の事務方のトップだった人が天下りでやってくるようになりました。

4 年後に河野善克さんが今度は参議院からやってくるということで、最初の金森さんは元大臣でした。館長候補だった中井さんも学者でしたが、春秋会事件がきっかけで、国会図書館の館長は衆議院と参議院の事務方のトップが交互に天下りをするという慣例が始まります。この時代が第 II 期の暗い時代、内向きの時代になります。

5.3 「三館体制」の終わり——金森さんの遺産

別表の建物を見ていただくと、1961 年に永田町に新庁舎ができます。これが結構プラスに働きます。それまで赤坂離宮と上野図書館と、三宅坂、3 つにばらばらに分かれて効率悪く仕事をしていたのが、今の永田町の本館といわれる建物ができて、効率よく仕事ができるようになりました。これは金森さんの功績です。たいていお役所の事業は予算が付いてから始まるまで最短で 3 年かかります。だから、何かが起きたら 3 年前の人が決めたと考えないといけません。あるいは大きな省庁、国会図書館の本館のような大きい建物をつくる場合には、もっと前から準備しないとできないので、このときにできた永田町の今の本館は金森さんの功績ということになります。

6. 第 III 期・前期：「図書館省」の時代 (1970-1986)

6.1 生え抜きの副館長(事務次官級)が生まれる

時代はさらに進んでいきますが、斎藤毅さんが 1965 年に総務部長になります。1970 年ごろから総務部長をやった人が大体は副館長になっていきます。たまにならない人もいますが、それは個別の事情がいろいろとあるようです。斎藤さんは初めて国会図書館の生え抜きとして、副館長になった人です。各省庁は、できてから最初はほかの省庁からいろいろな人たちが集まってきます。その省庁で育った人が首脳陣になることで初めて独立性がはっきり出てくるのです。このときぐらいから国立図書館として、あるいは国会図書館として、独自に良いことをしようじゃないかという機運が出てきたようです。

斎藤さんの部下の総務部長である鈴木平八郎さんは国立図書館について初めての単行本を書いた人でした。のちに鈴木さんが副館長になったときの総務部長が酒井悌さんで、後に副館長になるのですが、この人は大変いい人です。人柄もよく、見識もあり、歴代の館長・副館長の中でイチオシは酒井さんと言われています。

6.2 国会図書館が全国政策を

この時代、国会図書館は何ができたかという、III の前期というように私は時代区分をしましたが、国会図書館の生え抜きの人たちが、官僚たちがあたたかも「図書館省」の役人のようなことを始めました。

どういうことかという、国立図書館が全国政策に関与すべきことは、国際的に合意はあるのですが、実際に日本でも全国政策を文部省（当時）に成り代わって国立図書館が作ってしまうという不思議な時代でした。2006年に『図書館戦争』という有川浩の小説が出て、読んだことがある人もいます。あの小説の中で、国立図書館があたかも図書館省のように直接、公共図書館を管理しているかのような記述があります。実はそのような感じで一瞬、日本もこの時代は動こうとしたのです。具体的には法律をつくらうとしました。図書館事業基本法案というのが1979年にできるのですが、これは国会図書館がつくったものです。それを議員たちに認めてもらって、もちろん図書館員連盟というのがその舞台で通そうとするのですけれども、これは失敗に終わってしまいました。なんで失敗に終わってしまったかというのは諸説あって、はっきり言えない段階です。ようやく研究が始まったところです。

7. 第Ⅲ期・後期：図書館「協力」の時代 (1986-2002)

7.1 巨大館として他館を「援助」

国会図書館が外向きにいろいろなサービスの全国展開を一生懸命にしようとしていた時代が第Ⅲ期の時代です。しかし、結局、図書館事業基本法がうまくいかなかったもので、同じく外向きなのですが、違う方向に動きが変わっていきます。どういうことかという、法律をつくって他の図書館に何かしてもらおうことはやめて、国会図書館だけで全国サービスを直接しようという流れです。これが、私が図書館協力の時代と書いた1986年からの時代です。1986年に機構改革があって、図書館協力部という新しい部をつくって、ここを中心にいろいろなことを行いました。モデルは、イギリスの国立図書館が1970年代につくった貸出部です。この図書館では、来館者以外にどうサービスするかが昔から課題だったのですが、わざとイギリスの真ん中辺りの田舎に巨大な倉庫をつくって、そこから直接、国内のいろいろなところに本を郵送で貸すサービスを展開して、1970年代にすごく当たりました。そのままを国会図書館がしましようということになりました。

7.2 「(相互)協力」ではなく「(片務的)援助」では

主要な業務は ILL, テクニカルチームで言うところ

Inter Library Loan, 図書館同士の貸し出しなのですが、日本語に ILL を訳すと相互貸借という言葉を使います。しかし、国会図書館がやった ILL は相互ではないのです。一方的に貸すだけです。国会図書館の本を一方的に県立図書館や市立図書館に貸すだけというサービスです。理由はイギリスの国立図書館の貸出部がそういうモデルだったからです。それで一生懸命にやるのですが、実はこれは館内でかなり反対が強かったのです。相互ではないから協力ではない。協力というのは Cooperation の日本語訳ですが、相互的でないと Cooperation ではないのではないかと。むしろ一方的な援助、アシスタントなのではないかというように館内の総務系の人や、調査員系¹⁴⁾の人は盛んに嫌がるという図式がありました。私はこの図書館協力は正しい、一方的な援助も正しいという建前の時代に入館したので、図書館学的価値を信仰しています。しかし、実はかなり国会付属系、調査員系の人や、大きな図書館を単に運営したい、運営しなければという役人系の人からはすごく嫌がられていたようです。

あと、議員たちがいきなり国立の子ども図書館をつくりたいと1995年に言い出して、元参議院で児童文学作家だった肥田美代子さんと、自民党系議員の村上正邦さんがタイアップして国会図書館につくれと言ってきたので、できたのが国際子ども図書館です。部局が増えたり、定員が増えたりというのは役人としては成功になるのでいい話ではあります。

8. 第Ⅳ期：第二守勢期(2002-2007) 館長二階級降格事件

8.1 貸出図書館としての第二国立国会図書館(二国)

Ⅳ期は私にとっては少しマイナスの時代になっていきます。まず第二国立国会図書館（後に関西館という名前になります。以下、関西館）の建設が予定されていたのです。関西館の批判をこれからしますが、関西館の批判をするとすごく同僚が怒るので言いたくないのですが、学問なので仕方ありません。さきほど図書館協力部ができて全国に本を一方的に貸すという話をしましたが、一方的に貸すとどうなるかという、本がバタバタになるのです。納本で集めた保存用でもある図書を一方的に貸してバタバタにしたら困るでしょということで、2部納本が予定されていました。関西館はすごく交通のアクセスが悪いのですが、納本の2部目を置いてそこから郵

送すれば、全国一律のサービスが展開できるという話だったのです。

最初、関西館は2部納本とセット、副本を置くということでできた図書館です。が、実はこれも最後にお話しする亞書(あしよ)事件に関係してきます。普通の国では納本にはお金を払いませんが日本には納本代償金という制度があります。定価の約半分だったと思いますが、料金を払うことになっているのです。この料金は財務省のお財布から出るので¹⁵⁾。国会図書館としては2部納本にして、お金を払わないといけないことになっているので、財務省、当時の大蔵省に2部目のお金を出してほしいと言ったら、駄目と言われてしまったのです。予算がつかないと何も新しいことはできません。ですので、関西館の建物は建つけられども、どうするのかという話になって、最初の基本コンセプトが崩れてしまいました。

8.2 関西館構想の不明確化

特にまずかったのは巨大な閲覧スペースをつくってしまったことです。交通アクセスの悪いところに巨大な閲覧スペースをつくとどうなるか。隣に同じような建物で、厚労省の外郭団体が2003年に「私のしごと館」という、子ども向けにいろいろな仕事を体験できる施設をつくりました。官立のキッザニアみたいなものです。これがガラガラなのが議員の知るところとなり、盛んに批判されました。散々批判を受けて2010年に廃止されたということがあって、特に閲覧スペースがガラガラなのが議員にお叱りをうけるのではと、内部では言われていました。ただ、実際に関西館で働いている人たちはあまりそういうメタレベルの問題意識は持ちようがないので、現場で真面目に働いているのに私のような部外者がそういうことを言うと、僕たちは頑張っているのに、と怒りを買ってしまうこととなります。

8.3 小泉改革が立法府にも及ぶ

さらに時代は進んで、2000年代の前半は小泉改革があって、いろいろな省庁が統廃合されて縮小されていきます。これがなんと日本では珍しく、行政府だけではなくて立法府にも及びます。とにかく小泉首相のカリスマというのは当時、すごいものがあって、皆さんはまだ生まれていないかと思うのですが、国会のほうも改革しないといけない雰囲気になったのです。特に小泉首相が、国会も行政と同じように血を流さないといけないということで、国会図書館

の館長の地位が高すぎるとはっきりと名指しで発言し、大臣級だった役職が2階級降格されることとなります。

それ以外にも、衆議院に調査局という新しい部局ができて、国会図書館の調査局とすごく似た仕事を始めます。どうも日本の組織は、それぞれの枠の中でまた独自の進化を遂げようとする傾向があるらしいのです。それで、衆参の調査局と国会図書館の調査局を一緒にして直営に残し、本来の国立部門は行政法人ならぬ立法法人として外注化しようと自民党の議員が言い出したのもこの時代でした。これが春秋会事件以来の2番目の大変な時代になります。

9. 第V期:長尾ビジョンの時代(2007-2012)

9.1 館長降格による奇貨・学者館長の誕生

ところが、先月に亡くなった長尾真さん、京都大学の総長をやった人が降格された新しい館長として2007年にやってきました。彼が新しい外向きの時代を開いてくれることとなります。それで、長尾ビジョンとか長尾構想という言い方がなされますが、国会図書館がそれまで手を付けていた本の電子化をもっと大規模にやらなきゃ駄目だ、もう全部電子化すればいいということで、長尾先生が館長になって電子図書館事業が加速化し、120億円の新しい予算を付けて400万冊を電子化しました。これが非常に重要で、新しい展開の下地になっていくのですが、長尾先生の構想には、単なるデジタル化ではなく家からそれが見られるようにしようということまで入っているのです。それが長尾ビジョンといわれるもので、電車賃程度のお金をみんなから集めて、それで著作権処理をしましょう、これで家から直接、国会図書館の本を全部パソコン経由で見られるようにしようという計画を立てます。

9.2 「長尾ビジョン」の成功と失敗

最終的には正しいものだと私も思うのですが、中央省庁に勤めると分かるのですが、マスメディア、新聞社は第4の権力と昔から言われていて、三権すなわち司法・立法・行政の次にマスメディアが第4番目の権力として日本の国をつくる形になるのです。それはどこの国でもそうなのですが、この話を日経が聞き付けて、生煮えの段階でこんなことを国会図書館が考えている、とんでもない、特に大手の出版社の利益が損なわれてお金もうけができなくなりま

す、という記事を出して、つぶれました。電子化はできたのですが、それを外に、エンドユーザーに届けるという構想が日経のおかげでつぶれたと言っていると思います。

長尾さんは基本的に電子図書館ができればすべての図書館サービスの矛盾は解消されると思っていたようなので、途中でいろいろと説得するのですが、電子情報部という電子図書館推進の部局をつくる時に、代わりに主題情報部という国民向けのレファレンス部局をつぶしてしまい、国会図書館の職員のレファレンス力は低下しました。この時代、新しい流れが出てきた楽しい時代でもあったのですが、一方で、実は職員のレファレンスの力が落ちたりしました。

あと、実際に定員が減っています。年表の 2007 年の項目の一番右側を見ると 934 人の職員がいたのが、2 年たって 2009 年の定員は 898 人になっていて、2 桁レベル、40 人ぐらい職員が減りました。これは長尾さんのせいではなくて前の政治的な失敗がここに出ているのですけれども、お役所としては大失態、国で言えば領土が減るのと同じようなことです。一方で、長尾さんで衆参の天下りがやめになり、学者が連れてこられてデジタル化を進めたのはすごくよかったです。

結局、長尾さんは何年かしたらやめてしまうので、その次に大滝則忠さんが初めて生え抜きで館長になりました。この時代から館長が学者と国会図書館出身者の交互の慣例が、結果として成り立ちつつあるのが何となく分かると思います。

10. 第 VI 期：内部「評価」の時代 (2012-2022 現在)

10.1 作業の細分化と短期評価の導入

だんだん現在に時代が近づいてきていますが、長尾さんが去った後、あまりいい時代ではなかったです。電子化は進みましたが、それが家から見られないと、はっきり言って意味がないのですね。永田町に行かないと電子化されたものが見られないというのは、電子化された意味がほぼないのです。

10.2 亞書事件(2015)——納本代償金への疑問

この時代の一番大きなできごとは亞書事件です。「りすの書房」という自費出版を行うところが定価 6 万円のオブジェ本をつくって国会図書館に納めて

きた。そうすると、さっき 2 部納本制が駄目になったときに納本代償金の話をしました。代償金は半分の値段を払うので、3 万円を払ったのです。そうしたら、それをインターネットで誰かが見つけたのか。実際に読んだ人がいたのか。それを書庫から実際に出して読んだら、意味不明な文字が並んでいる読めない本だったのです。読めない本に税金を 3 万円も払うとは何事だと主にインターネットで騒ぎが始まって、それをマスコミも取り上げて、納本制度の根幹に関わる大事件になりました。特にこういう事件が起きると、現場の人たちが本を集めるのを少なくしようとするのです。つまり、何か理由を付けては怪しげなものを集めないという方向になって、あまり納本制度にとってはよくなかったと思います。私個人というか、私の周りでは納本代償金そのものが実はあまりよくない制度で、海外にほぼないし、いろんな事件の原因になるのでやめるべきという話になっています。

10.3 MANGA 議連への反対

2017 年に、さきほど児童図書館が議員のおかげでできた話をしましたけれども、今度はマンガ図書館をつくってくれと MANGA 議連から言ってきたのです。役人道から言うと、議員から何か頼まれたら絶対に反対したら駄目なのです¹⁶。反対したいときには、違う形ならできますという言い方をしないとイケません。ところが、当時の館長の羽入佐和子さんは、やりたくないとはっきり議連の人たちに言ったのです。

これは大失態です¹⁷。正確には、館長にそう言わせた周りの人が駄目だということです。副館長に誰がいるかというのは何となく分かると思うのですが、外から来た館長はそういう役人道とか国会の中の力関係は分からないから、そういうのは生え抜きの人がちゃんと説明して誘導しないとイケないのです。それをしなかったのか、できなかったのか分かりませんが、MANGA 議連の人たちに反対しました。だけれども、議員たちというのは、要するに無理を通すのが政治だと思っている節もあり、絶対にそれでやめるということにはならないのです。結局、今の段階はどうなっているかという、まだできていませんけれども、文科省の支部図書館のさらに支部としてマンガ図書館をつくるということで、文科省の支部図の人が大変に悩んでいたという話を聞きました。

10.4 コロナ禍で「長尾ビジョン」が再始動

そんなこんなで、せつかくの長尾ビジョンが足踏み状態になっているのがここ10年で、2020年からコロナ禍でみんなが家から出られなくなって、やっぱり家で電子図書を見られなきゃしょうがないでしょうということで議員たちも動いて、著作権法が改正されようとしています¹⁸⁾。これは内側からの動きではなくて、議員から言われてやっているという位置付けになります。

11. さいごに 70年史のまとめ

11.1 国会付属の部分は文献調査代行業で不変

国会図書館の70年をまとめると、国立の一般論にもありましたが、国会付属の部分は文献代行調査を70年ずっとやって¹⁹⁾、仕事は基本的に変わらないです。これは国会図書館の防御にはすごくいいのですが、小泉改革では国会に見切られたり、あるいはMANGA議連の人たちを怒らせたりというのは、実は非常に危ないということになります。

それから、長尾さんのときに〔国民向け〕レファレンス部門をつぶしてしまい、レファレンス機能が低下してしまったので、国会図書館の設置目的はご存じかもしれませんが、日本の民主化と世界平和と本当に法律に書いてあるのです。日本の民主化というと、やっぱり調べ物とセットでなくとも民主制も動かないはずなので、これをどうするかという話です。

それから、春秋会事件のときもそうなのですが、終始一貫して複写のニーズがどんどん増えているので、それをどうするかです。これは電子図書館の著作権法改正の問題にもなります。IRD企画とここに書いてあるのは、春秋会がなくなった後に同じ外郭団体をまたつくろうとした人たちがいて、その固有名です。

それから最後の点ですけれども、国会図書館の雰囲気の内向き・外向きですが、直接来館の人たち、あるいは国会サービスを優先すると何となく内向きになって、全国サービスを展開するためには外向きという雰囲気が大体セットでありました。デジタル図書館ができて、全国サービスでなおかつ直接国会図書館がエンドユーザーまでサービスできる新しい手段ができたので、これをこの先、真面目に展開していかないといけないだろうと考えています。

11.2 春秋会がもし存続していたら

さきほど、春秋会という外郭団体の複写サービスをやっていたという話をしましたが、実は最初、1948年の米国図書館使節のメモランダム、つまり覚書に「補助サービス局」という部局が書かれていて、そこが複写をやることになっていました。これはメモに最後に設置しなさいと書いてあったので、最後でいいのか、後でやろうということで、結局できなかったのですが、補助サービス局というのは実は、今で言うリモートサービスに特化した部局²⁰⁾だったのです。全国展開するための仕事をそこで一括してやるということで、春秋会はもともと違う機能、出版物を出すための団体だったのが、複写サービスがどんどん拡大して、引きずられて事件になっていきました。アメリカの使節団の言うとおりに初期から補助サービス局をきちんとつくってれば、春秋会事件は起きなかったのではないかと最近思うようになりました。

以上で、「国会図書館七十年史」、外向き・内向きということを述べた形になります。

文献的補足——国立図書館研究のために

先行文献について

国会図書館は今までに1980年、1999年、2021年の3回、正史を出版しているが、正史ゆえ表立った価値判断が避けられており、業務報告の集積となっている。一定の観点から時代区分を設定するような議論は、『明治大学司書・司書教諭課程年報』10号(2010.3)に載った鈴木宏宗「(特別講義)国立国会図書館の歴史」(p.37-40)がほぼ唯一のものである。そこでは、1.成立・草創期(1948-)、2.安定・拡大期(1959-)、3.転換への過渡期(1995-)、4.転換期(2005-)の4期に時代区分が設定されている。

私は主に、政策の指向性から6期(1948-、1958-、1970-、2002-、2007-、2012-)に区分したが、鈴木は「政治的な面と図書館をとりまく技術の面から」時代区分したとある。1958年は春秋会事件、1995年はインターネット普及、2005年は館長二階級降格事件であり、注目する事件は同じでありながら、春秋会事件の影響を幹部職員の失脚・横死にのみ限定的に見ている点で、政策的には草創期から安定期まで一貫して安定・拡大しているようにみえること、内発的で良い施策(基本法案や図書館フ

オーラムなど) が個人の資質に負うようにみえることにやや難があると思う。資質のある個人が活躍できる環境、組織風土は、やはり良き幹部や知識ある専門家群で醸成されるように、年表からは感じられる。また、政治的枠組みや技術環境など、内部要因というより外部要因で区分するため、国内図書館では例外的に図書館員による経営権が独立している国会図書館の良さが、いまひとつ見えてこないように思う。

ただし、鈴木による 2005 年の危機で出来た奇貨・学者館長のスタッフの弱さ²¹⁾の指摘は、出身の紀州から大量のスタッフを入れた徳川吉宗の改革を鑑にすれば納得されようし、私が 1970 年ごろの転換点に、生え抜きの副館長などに優良な首脳陣の発生を見たこととも通じるものがある。長尾館長が 2011 年に去って後、デジタル化は事実上止まり、昨今のコロナ禍でようやく、10 年間館内閲覧に留まっていたデジタルコレクションのネット公開が再始動した事実は、長尾のリーダーシップ頼みだった体制を物語る。このことから、私が設定した外向きの V 期が、実は 2002 年からの IV 期の小春日和だった可能性も考えられる。つまり、内向きの IV 期が 2002 年から 2021 年まで続いているという可能性である。だとすれば、私の時代区分も鈴木説と同様、実質 4 期となる。

国会図書館史関係文献について

主要なものは前述の鈴木論文末尾にある。ただし、国会図書館史を論じる際の問題は、記事が多すぎ、一方で重要事件が正史で書かれづらいため、論点・転換点が部外者からよくわからないことである。また、亜書事件のように、当座の被害だけでなく、現場が自衛のため納本をなるべく狭くとるようになったことなど、見えない影響関係も書かれづらい。

正面から論じられない裏面史の調べ方については『満鉄調査部から国会図書館へ：調査屋流転』（金沢文圃閣, 2019）解説（p.282-245）に書いておいた。この解説について国会図書館の OB 宍戸伴久氏に批判をメールでいただいたが、そういったものは、できれば公刊してほしい。国会図書館史の専門家などはいないので、査読なども困難だろうから。

半世紀近く忘れられていた補助サービス局については「永田町立がナショナル図書館になる方法：補助サービス局と春秋会のアナロジー」（『文献継承』33号 p.4-15, 2018.9）を参照のこと。

外注、非常勤を含めれば 1000 人前後のスタッフを要する図書館は日本ではここだけだ。他の図書館は大規模館でもスタッフは 100 人前後だろう。その大組織が 70 年間稼動すれば膨大な「事実」が積み重なり、一定の観点や枠をはめないと、結局それは理解には遠い編年史になってしまう。そこで、70 年を見通す際に、主要事業、新規目玉事業の性格付け（政策でもある）に注目し、全体として外向き（国立中央的）、内向き（国会付属的、来館レファレンスの）の時代に区分してみた。

注・引用文献

- 1) 資料保管部局とも言われる。NDL における部署の系統は、概ね建制順で、総務部、調査局、一般レファレンス系、閲覧系に分けて考えられている。
- 2) 日本官僚のエートスが定式化されたような文献は意外と少ない。境光秀『郵一君物語：ある財務官僚の昭和史』（財経詳報社, 1995, 2 冊）、佐竹五六『体験的官僚論：55 年体制を内側からみつめて』（有斐閣, 1998）が参考になる。また、NDL 職員を、中央官僚とみなせるか、ただの現業職員とみなせるかは、私見では政策の内向き・外向きで事後的に決まる。戦後改革の余沢で、少なくとも官僚として振るまえるだけの高位ポストは十分にあった。
- 3) 図書館研究所の事務を継承した関西館図書館協力課では調査研究を所掌しているが、研究所時代と異なり、実態として NDL 職員が研究に参加しなくなった。
- 4) 正確には、国立国会図書館法第二条の列举順序で示されているという解釈になっている。ただし、この法律の逐条解説（コンメンタール）はまだない。日本法は抽象度が高く、行政解釈とセットでないと使えないため、所管省の担当者がコンメンタールを私的に出版して法律を使えるものにする慣例がある。コンメンタールがないこと自体が課題であろう。
- 5) 調立は 1990 年代までの古い言い方。
- 6) ギ・シルヴェストル『国立図書館のガイドライン』日本図書館協会, 1989, p.99.
- 7) 正確には本省直属の各種研究所並み。館長が課長クラスだったのでこう表現した。
- 8) 帝国図書館長だった松本喜一が、予算も権限もないなかで、啓蒙活動などを繰り広げ、当時の時流に乗ろうとしたため、石井敦などに実力以上に過大視されている。
- 9) 実際のところ、法制定時のマスコミ及び世論の反体制的雰囲気から言って、不可能であったろう。現在はそうでないが、過料の徴収手続きを作らない不作為について、政策課題として文書で見たことがない。ただし、担当課長が変わると、作りたいという人はまれに出る。
- 10) 基本的に事業は継続される。例えば議員向け文献調査代行事業は 1948 年から始まり、現在も継続中である。継続が明示される在世年表のような形式が望ましいだろう。
- 11) NDL はレッド・ページがなかった珍しい中央省庁らしい。
- 12) 雰囲気をつかむには小説がよい。江崎誠致『離宮流』（講談社, 1960）
- 13) NDL の通史は、春秋会事件に触れないでは書けない。本文末尾で挙げた「補助サービス局」の存在に気づいてか

らは、むしろ国立図書館として必須の機能であるので、避けて通ると通史がそもそも成り立たないと私は考えるようになっていく。箝口令を墨守する人々は数年前を最後に去った。これからは、今回の私の講演を含め、学問、歴史の対象として論じるべきと思う。春秋会をただ疑獄事件の原因になった外郭団体と考えると、図書館史研究、国立図書館研究ではもったいなさすぎる。正史では「三十年史」にのみ春秋会事件の記述がちゃんとあり、これは一見識であったろう。

- 14) NDLのキャリア・パスは、NDL独自の官職名「調査員」「参事」「司書」と3種類あるように、基本的には3系統になるが、おおむね最初に配属された部署——本人の希望とは無関係。私の時には氏名の五十音順だとうわさされた——がどの系統かで決まってしまう。司書系はカタログラー、レファレンサー、閲覧系の3つのサブ系統に分かれる。1990年頃までほとんどの新人を閲覧系に入れて、あとで調査員や、カタログラー、レファレンサーにわけていくというキャリア・パスがあった。それぞれに固有のエートスがあったが、ここ20年ほどで調査員以外は薄くなった。そのきっかけは、1986年に新規導入された幹部候補生制度(1種、総合職)がある。初期をのぞいてNDLに上級甲種はおらず、上級はみな事実上、乙種で、自然とライン系(マネジメント)、スタッフ系(専門家)に分化した。それが最初から固定的となり、結果として良い管理職が生まれにくくなった一方、幹部候補生の短期異動に全体が引きずられ、専門家が育たなくなった。

- 15) 行政作用は省庁別に発揮されるが、財政作用は三権一体だから、とされる。
- 16) 言うまでもないが、議員は国民の信任を直接得ているのでその意見は尊重されるべきである。
- 17) 私個人はMANGA図書館設置に賛成である。日本語のコンテンツでは是非でもと世界から求められるものはマンガやアニメ、ゲームぐらいではなからうか。
- 18) 2021年に著作権法が改正されたので、2022年から登録利用者のみ、著作権処理が手つかずの著作物もオンラインで外部から閲覧できるようになる予定。
- 19) NDLの調査及び立法参考局が実際は何を事業としているか、について第三者的な記述は少ない。城山英明ほか『中央省庁の政策形成過程』(中央大学出版部, 1999)の11章「国会図書館」が概略を理解するのに役立つ。また、図書館学的には「最大理論」でレファレンス・サービスをしていると解釈できるが、部局名にある「調査」と「立法参考 (legislative reference)」の違いなどの論点も、枝吉勇の『調査屋流転』などで言及されているが、論じられたことはない。1998年に設置された衆議院調査局との競合・緊張関係も要注意である。
- 20) 永田町での成果を均霑(きんてん)化する部局と言ってもよいだろう。「均霑化」は医療政策用語。全国どこでも等しく高度な医療をうけられるようにすること。
- 21) 長尾さんは人事など内政改革をしなかったのが残念だった。

別表 国会図書館時代区分年表

外向	重大事件、事業	国会付属的 来館（内向き）	参考図書館的 来館（内向き）	全国的（national） リモート（外向き）	建物・場所	館長	副館長	総務部長	定員・部局 職員生活
内向	1945 敗戦				議事堂				7局案
	1946								5局1分館
I	1947 米国会図書館使節団	(国立なしの) 国会図書館			赤坂雑宮	金森徳次郎	中井正一(学)		7局1分館→1局6部1分館
	1948 幹部人事、中井了力説	行政司法18支部図書館設置							489
	受入局長罷免事件		上野図書館の大蔵書	整理部→国際業務部				中根秀雄	525
	「国立図書館」を併合			『雑誌記事索引』	三館体制				591
	1949			『読書春秋』					
	1950			『全日本出版物総目録』(-1976)					
	1951			『官庁刊行物総合目録』					
	1952			『日本法令索引』			中井・死亡		
	1953		複写規程できる	『日本学術雑誌目録』(-1988)			空位		
	1954						中根秀雄	山下平一	555
	1955								
	1956								
	1957 JICST								
II	1958 春秋会事件			『新収洋書総合目録』(-1990)			中根死亡	枝吉 勇	
	1959 春秋会廃止		一般考査部→閲覧部				岡部史郎(行)	戸引達	支部図書館部を廃止
	1960 新庁舎(永田町)		三館体制の終わり	FID加盟、『NDL月報』	永田町			原田三千夫	663
	1962 ローマ字闘争(-1965)			『NDL蔵書目録』『図書研究シリーズ』					768
	1963			『科学技術文獻サービス』(-2000)					
	1964		NDLC表、閲覧部→参考書部						803、建築部廃止
	1965 館長天下り慣例化			NDLSH表					
	1966	IFLA加盟		『印刷カード通信』				斎藤 毅(つよし)	
	1967								
	1968								829
	1969		業務機械化室						

外向 内向	重大事件、事業	国会付属的 来館（内向き）	参考図書館的 来館（内向き）	全国的（national） リモート（外向き）	建物・場所	館長	副館長	総務部長	定員・部局 職員生活
	1997 IRD企画		OPAC提供	IRD企画	//	//	宮脇岑生	伊藤尚武	
	1998 関西館起工		電子図書館基盤システム	ゆにかnet	//	戸張正雄（参）	//	宇治郷毅	1局6部1分館1直轄支部
	1999 子ども図書館		国会アルテキ公開	国会アルテキ公開	永田町、上野	//	伊藤尚武	//	
	2000				//	//	//	大滝則忠	
	2001 小泉改革（～2005）中央省庁再編			図書館研究所廃止（2002）	//	//	宇治郷毅	//	
IV	2002 関西館開館、近デジ		基盤システム稼働、WARP	三館体制	三館体制	黒沢隆雄（参）	//	//	920、1局5部4分館2支部
	2003			『図書館調査レポート』	//	//	大滝則忠	安江明夫	部局「企画課」新設（2002）
	2004			法令索引DB公開	//	//	安江明夫	//	勤評始まる
	2005 館長二階級降格			レファ協DB公開	//	//	//	吉永元信	昼休み短縮
	2006				//	//	生原至剛	//	1940
V	2007 長尾ヒジョン	国会分館課に降格			//	長尾真（学）	吉永元信	内海啓也	1934、分館降格
	2008	部局1減		書誌部廃止	//	//	//	//	1局4部2直轄支部
	2009 大規模D化（120億円400万冊）		元厚生事務次官宅電卓連続盗難事件	大規模D化	//	//	//	田屋裕之	1898、東洋文庫廃止
	2010				//	//	//	//	
	2011 東日本大震災	電子情報部	国民向けレファレンス部廃止		//	//	田屋裕之	網野光明	主題情報部廃止
VI	2012 館長選任の新傾向		アレフ（OPAC）不評 著作権法におけるNDL特権		//	大滝則忠（国）	池本幸雄	石川武敏	
	2013				//	//	//	//	
	2014 MANGA議連				//	//	網野光明	山田敏之	
	2015 亞書事件				// +子ども新館	//	//	//	
	2016				//	羽入佐和子（学）	//	//	
	2017 MANGA議連に反対				//	//	坂田和光	田中久徳	
	2018		新OPAC		//	//	//	//	
	2019 コロナ禍	各種DB更新		ジャパンサーチ（試験版）	//	//	田中久徳	片山信子	888
	2020			外部からのD公開要求	// +関西館書庫棟	吉永元信（国）	//	//	893
	2021 追加D化60億円			著作権法におけるNDL特権	//	//	//	//	